85　『史記』扁鵲倉公列伝の張守節注に見える引用経文

橋本　典子
日本鍼灸研究会

唐の開元24年〔736〕に成立した張守節の『史記』注解書『正義』の扁鵲倉公列伝部分には，注解に医学書が多量に援用されており，その内容は医書校勘の観点からきわめて重要であるので，その内容を調査して報告する．底本には.『史記正義』の佚文を諸版本より多く収集，復元している『史記会注考證』を用いた.『史記会註考證』（1932～1934年）は，瀧川資言が清朝の考証学者や日本の江戸期の学者の説を取り入れて編纂した『史記』注解書の白眉である.『史記』三大注釈書『史記集解』『史記索隠』『史記正義』を収め，「考証」として，瀧川自身も注をつけている．なお校勘資料として，『史記会註考證』を底本とし，『史記』各版本の文字の異同を整理した水沢利忠著『史記会註考證校補』（1957～1962年）を用いた.

扁鵲倉公列伝の張守節注には，「黄帝素問」「素問」として18条，「黄帝八十一難」「八十一難」として13条，「王叔和脈経」「王叔和」として9条の引用書名が見られる．これらを現行のテキストと照合すると，『素問』18条のうち，顧従徳本『素問』（『四部叢刊』所収本）と同文または類文は，陰陽応象大論篇第五, 五蔵生成篇第十（2カ所），平人気象論篇第十八，玉機真蔵論篇第十九，蔵気法時論篇第二十二，厥論第四十五からの7条文で，残りの11条文のうち，1条文は『難経』五十一難に類似し，その他10条は見いだすことはできない.『難経』13条は，すべて現行の日本慶安五年本『難経集註』の序，三難（2カ所），十三難（2カ所），十五難，十八難，二十難，二十三難，三十一難，四十五難，五十一難（前述のように「素問云」として引用），六十六難，六十七難（2カ所）に見られるが，そのうち三難と十三難には呂広注が各一条含まれ，序と六十七難の一条は楊玄操からの引用である.『脈経』9条は，すべて基本的に何大任本『脈経』（『東洋医学善本叢書』第七冊）の巻第一・脈形状指下秘訣第一，分別三関境界脈候所主第三，弁尺寸陰陽栄衛度数第四，遅疾短長雑脈法第十三（2カ所），巻第二・平人迎神門気口前後脈第二，巻第三・肝胆部第一，心小腸部第二，脾胃部第三，肺大腸部第四，腎膀胱部第五，巻第四・弁三部九候脈證第一，平雑病脈第二，第六巻・心手少陰経病證第三，巻第八・平五蔵積聚脈證第十二と一致するか類似している.

三書の引用にははっきりした特徴があって，『素問』が全編にわたって偏り無く引用されているのに対し，『難経』は概ね扁鵲伝の部分に引用され，『脈経』は専ら倉公伝の部分に引用される傾向にある．唐代には『難経』を秦越人扁鵲の著作とする伝承が定着しており，張守節注はそれを忠実になぞっているといえよう．これに対して倉公伝の注解で『脈経』をしばしば援用しているのは，倉公伝の内容の持つ，実質性と関係があるように思われる.『素問』からの引用に，現行の『素問』に見えない経文が多い理由は不明であるが，『難経』や『脈経』の引用が比較的正確であることを考えれば，単なる引用の誤りでなく，『素問』の注解を「『素問』云」として引用している可能性もある.

なおこれ以外にも，倉公伝の診籍の末尾に，引用書名を挙げないで，長文の医学関係条文が引用されているが，それらは『難経』の四十二難，二十三難，一難，三十七難とその楊玄操注からなる．三十七難は『霊枢』脈度第十七にも見えるものであるにも関わらず，『難経』が用いられていること，また張守節注において『霊枢』が引かれていないことは，『霊枢』の伝承を考える上において興味深い.